特集 石材業界におけるアマビエチャレンジ！

足元まで垂れたロングヘアに鳥のようなくちばし、うろこのある胴体からは3本脚が生えている姿のこの妖怪は、江戸後期の肥後国（熊本県）に現れたとされている。新型コロナウイルスの感染拡大が不安視される中、この「アマビエ」の絵を自己流に描いて投稿する「アマビエチャレンジ」の動きがツイッターやフェイスブックなどのSNS上で広がり、石材業界にも波及することになった。今回は石材業界における「アマビエチャレンジ」に注目してみたい。

ツイッターに投稿された京都大学附属図書館所蔵の「アマビエ」の絵

製作したアマビエグッズがSNSでの情報発信で好評！

ツイッターなどのSNSでアマビエが話題になり始めたのが2月の終わり近く。それから3月から4月にかけて、「アマビエ」「アマビエチャレンジ」「アマビエ祭り」といったハッシュタグを付けた投稿によって、アマビエの存在は注目されることになった。

このアマビエの絵は江戸後期に刊行された瓦版に掲載されており、その原本が京都大学附属図書館に所蔵されている。同図書館では、貴重資料デジタルアーカイブで公開されているこの絵を3月6日にツイッターに投稿して大きな話題になった。

「当年より6年間は豊作が続くが疫病も流行する。私の姿を描き写した絵を人々に見せよ」と予言めいた言葉を残し、海の中へと帰って行ったという妖怪「アマビエ」。

その後、厚生労働省も新型コロナウイルスの感染拡大防止を啓発するアイコンにアマビエの絵を使用するなどし、アマビエはあっという間に広く知れ渡ることに。外出自粛が要請される中、不安な気持ちを払拭し、一日も早い事態の収束を願って、人々は思い思いにアマビエの絵を描くなどするようになっていった。

4月になると石材業界にもアマビエにちなんだ活動が見られるようになってきた。特にフェイスブック上で話題になったと思われるのは、㈱大橋石材店（神奈川県横須賀市）の大橋理宏社長の取り組みである。大橋社長はアマビエのイラストを家紋デザイナーの沖のり子さんに依頼し、石プレートに彫刻。Tシャツやトートバックにもプリントしてそれらの販売をネット上で展開した。経緯を次のように話す。

㈱大橋石材店・大橋理宏社長

「4月15日の朝にテレビのニュースで〝アマビエ〟が取り上げられているのを見たのですが、その時まではてっきり〝アマエビ〟だと思い込んでいました（笑）。

そういった間違いも含めてアマビエは話題になるし、これは面白いということで、その日のうちに家紋デザイナーの沖さんに連絡をしてイラストをお願いしました。5日後にはイラストが出来上がってきましたね」。

イラストは3パターンあり、比較的太い線で描かれた2種類のイラストは石プレートに彫刻され、そのうちの1つをトートバックにもプリント。細かい線で描かれたものはTシャツにプリントされた。

これらのアマビエグッズはツイッターとフェイスブックでPRされ、一般の人・石材業界人を問わず多くの方たちから反響があった。Tシャツは20日間で60枚の注文を受けたという。

「アマビエグッズを作る少し前に『コロナに負けるなキャンペーン』というのを始めました。アマビエグッズはそのキャンペーンのプレゼントアイテムという面もあります。また、うちは職人であると同時に商売人でもあるので、気持ちが滅入ってしまわないように日々少しずつでも売上を積み重ねていけるものを作っていこうと考えました」。

トートバックやTシャツは実用性もあるため、気軽に注文をする人が多いようである。石プレートに対する一般の方からの反応は「かわいい」「癒やされる」といったものが多く、「石に対して興味を抱いてもらえれば」という大橋社長の狙いも当たったようだ。販売単価から考えれば、決して大きな売上になるわけではないが、アマビエグッズやキャンペーン活動の背景にある目的は、「話題づくり」「絆づくり」だといえそうだ。

大橋さんが製作したアマビエの石プレート・トートバック・Tシャツ

それぞれのアマビエチャレンジ 各地で多彩なアマビエが登場！

アマビエは熊本に現れた妖怪である。そのご当地である熊本県天草市の大島子諏訪神社に、アマビエの石像が5月に建立された。製作・施工したのは地元の黒川秀徳さん（黒川保石材店＝小売石材店）で、神社から話があってからわずか1週間での建立である。明治時代に疫病が流行したとき、地域の人々がこの神社のそばにあった石神の祠にサカキを供えて祈ったという言い伝えがあるそうで、今回の石像建立にはそうした歴史的背景がある。

「大島子諏訪神社の宮司さんとは以前からお付き合いがあり、以前に自社加工の灯籠を納めたこともありましたので、そうしたご縁から今回の石像のお話をいただきました。素材には佐賀県産の唐津石を用い、立体としてはどんな形をしていたのかはよくわかりませんから、下絵は描かずに頭の中にあるイメージで加工していきました」。

黒川保石材店の黒川秀徳さんが製作・建立したアマビエ石像

黒川さんが製作したアマビエの石像は、ゆるキャラのようなかわいらしいイメージがあり、新聞やテレビなどにも取り上げられることになった。「今回の事態が一日も早く収束することを願うとともに、アマビエの石像を見て微笑んでくれたらうれしいですね」と黒川さんは話している。

＊＊＊

アマビエが熊本で出現したことにちなみ、熊本県産の溶岩石を用いた石像彫刻を開発（福岡の八女石産地で製作）したのは、静岡の石材卸商社である㈱イシフクだ。

彫刻完成後にフェイスブックで紹介したところ、すぐに複数の取引先石材店から注文が寄せられたという。石材店の中には地元の幼稚園などに寄付することを考えて購入されたというケースや、寺院への設置提案などを予定しているところもあるようだ。

フェイスブックでの情報発信により、広いエリアから反響があったようで、「今後も継続的に情報発信していく予定で

㈱イシフクでは熊本県産の溶岩石を使用してアマビエ石像を製作

す」と同社・望月秀康社長は話している。

＊＊＊

神奈川県真鶴町の㈲亀川石材店では、同社で採掘する本小松石の稀少価値を感じてもらうコミュニティ「応援し隊」を2年前より発足している。この「応援し隊」に加盟している取引先石材業者ら約40名の隊員に対し、同社の亀川洋社長はニュースレターと一緒にアマビエのお札を送った。「先が見えない不安の中で、少しでも喜んでもらおう」と亀川社長みずからアマビエのお札を一枚ずつ手描きで作成し、そのお札を持って神社へ疫病退散祈願にも行ったそうだ。

作成や祈願の様子などは動画で撮影し、SNSへアップ。視聴者からの反応は好感触だったとのこと。お札を受け取った人からは、お礼の手紙やメール、電話、SNSでのメッセージなどが寄せられたようで、お返しにマスクを郵送してくれた方や、トラックの中にお札を飾っている方もいるという。

㈲亀川石材店の亀川洋さんはアマビエのお札を手描きで作成。取引先石材業者など約40名に送付したところ大変喜ばれたという

㈱イシフク製作のアマビエ石像

現在、亀川社長みずから製作するアマビエを彫刻した五輪塔づくりも考えているそうである。

＊＊＊

島根県の石材卸商社である㈱石販では、新型コロナウイルスの一日も早い収束と、かつての日常が早く取り戻されることを願って、アマビエのイラストを黒みかげの石プレートに彫刻し、同社事務所のカウンターに設置。デザインはフリー素材をアレンジして、サンドブラストで彫刻し、彩色を施したものである（サイズは約18㎝×36㎝）。

フェイスブックを通した情報発信も行なっており、同じような彫刻は近くの石材店に依頼すれば作れること、さらに、エンドユーザーが描いたアマビエも石プレートに彫刻できることなども紹介。石材店への集客・広報をバックアップする姿勢での情報発信である。

＊＊＊

愛知県岡崎市の㈲稲垣石材店（小売石材店）では石の端材を活かして「アマビエ石板」を製作（サイズは15㎝×10㎝×1㎝）。「新型コロナに負けない！アマビエ石板プレゼント企画！」を行ない、自社ホームページで希望者を募ったところ、早い段階で募集人数（10名）に達したという。

同社では「予想以上の反響がありましたので、現在、その第二弾企画を展開しているところです。石にアマビエを刻むことで、もっとも丈夫な絵になるはず。この石板を見て、皆様の心が少しでも軽くなれば嬉しいです」と話している。

㈱石販が製作した石プレート

㈲稲垣石材店ではアマビエ石板プレゼント企画を行なった

＊＊＊

新潟県新潟市の㈲森忠石材店（小売石材店）では、一日も早い感染症の収束を願って、黒みかげの石プレートにアマビエを彫刻。その画像をフェイスブックに投稿したところ、多くの方から「いいね！」の反応があったようである。語呂がよく似ている「アマエビ」のイラストもプレート右下にワンポイントであしらうことで、親しみが感じられるデザインになっている。

同社では昨年4月に新元号が決まったときも、「令和」と彫刻した石プレートを製作し、同社の森澤達矢社長がそれを菅官房長官のごとく掲げた写真をフェイスブックで紹介。今回同様に反響を得たという。「当社の存在と共に、石でいろいろなことができることを知ってもらうきっかけになれば嬉しいですね」と森澤社長は話している。

㈲森忠石材店が製作した石プレート

森澤達矢社長

＊＊＊

群馬県前橋市の小峯善石材工業㈲（小売石材店）の小峯隆一社長は、新型コロナウイルスの収束を願って、群馬県産のくぬぎ石でアマビエのレリーフを作り、それをフェイスブックに投稿した。自粛生活が続く5月の大型連休を利用しての彫刻である。

「普段は、文字彫刻のサライ仕上げのほかは、手加工をすることもほとんどありませんが、加工道具もくぬぎ石も会社にあったので、取り組むことにしました」とのこと。くぬぎ石は目が細かく彫りやすかったようで、1日半で仕上げたという。石の質感を活かした、やさしくかわいい仕上がりになっている。

小峯善石材工業㈲の小峯隆一さんが製作した石彫刻

＊＊＊

庵治石の採掘ならびに石材加工メーカーである㈲石材商太元屋（香川県高松市）では、和泉恵美さん（和泉憲社長の奥さま）が4月初旬にアマビエの彫刻作品を製作した。恵美さんがデザイン・製作を担当する『e Moyō』というブランドは、同社で採掘する庵治石極細目「漆黒・KURO」を素材に使ったもので、恵美さんが手描き・手彫りで製作しているもの。アマビエの彫刻作品もそのブランドのひとつとして製作された。

一日も早いウイルス感染の収束を願って、「神様、仏様、お願いできるところにはどこでも、という思いで製作しました」とのこと。会社・自宅等に置いているほか、フェイスブックを通じて知り合った石材店にプレゼントしたところ、大変喜んでいただけたそうである。

㈲石材商太元屋の和泉恵美さんが製作した「e Moyō」プレート

取材メモ

このように、石材業界においてもさまざまな「アマビエチャレンジ」が見られている。スタンスは人それぞれではあるが、それらの活動に共通しているのは、感染症（ウイルス）の一日も早い収束（終息）への願いである。それに賛同する人たちによってSNS上で反響が起こっている。

アマビエという話題は今年だけの一過性のものになるかもしれないが、さまざまなアマビエチャレンジから見えてくるのは、これからの時代に必要とされるであろうSNSなどを活用した情報発信というテーマである。今回のような「話題づくり」の取り組みは、SNS上で反響を得やすく、また、それによって「絆づくり」にも結び付きやすいといえそうだ。